

2023年9月10日 主日礼拝

説教題「方向転換」 マルコ福音書 10章 17～27節

主任牧師 加藤 誠

**「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。『あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい』(マルコ10章21節)。**

主イエスは「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という言葉をもって宣教を始められました。この場合「悔い改めて」とは「方向転換」を意味しますが、今朝はこの「方向転換」の中身について聖書に聴いてみたいと思うのです。

主イエスが旅に出ようとされるとある人が走り寄って、ひざまづいて尋ねました。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか」。走り寄って、イエスの前にひざまづいて、尋ねる。そうそうあることではありません。主イエスのもとを訪ねてきたこの人の真剣で切実な思いが見えてくるようです。

けれども主イエスはこの人に大変厳しい言葉をぶつけられます。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」と。金持ちの男はこの主イエスの言葉に大変な衝撃を受けまして、気を落とし悲しみながら主イエスのもとを立ち去って行ったのでした。わたしは主イエスのこの言葉を読むたびに「ちょっと厳しすぎやしないか。一体だれが、この言葉に従うことができるのだろうか」と思わずにはおれません。

ただ覚えないことは、主イエスは「永遠の命」を求めてやってきたこの人を決して「拒絶」したのではなく、この人を「神の国」に招き入れるため、大切な気づきに導くために、この厳しい言葉をぶつけられたのだろう…ということです。それは主イエスが厳しい言葉をぶつける時にも「彼を見つめ、慈しんで言われた」という言葉にもあらわれています。主イエスはこの人を冷たく突き放したのではありません。深い慈しみをもって、この人を招かれたのです。

では、主イエスがこの人に「あなたに欠けているものが一つある」と言われた、その「欠けているもの一つ」とは何だったのでしょうか。ここでの二人の言葉のやり取りをみれば、「持っている物を売り払い、貧しい人に施すこと」、「その実行があなたに欠けている」ということなのでしょう。わたしはそうは思えません。なぜなら、それであれば「神の国」は「行為義認」つまり「神の戒めである隣人愛を完全に実行出来た者だけが入れる国」になってしまうからです。

興味深いことに、今朝の箇所直前には「子どもを祝福する」場面が出てきます。そこでは「律法を理解し、律法を実行する者が入ることのできる神の国」ではなく、「何もできない、小さな幼子が迎え入れられる神の国」が示されて、弟子たちが驚いています。そして今日の場面の後半でも「金持ちが神の国に入るのは何と難しいことだろう」と言われた主イエスの言葉に驚いて、弟子たちは「それではいったい誰が神の国に入れるのだろうか」とつぶやいています。当時、金持ちは神から祝福さ

れた人で、献金もたくさんさげられる、いわば「できる人」「神の国に入りやすい人」と考えられていたのですが、主イエスはそのようにして「出来る人」が入れる神の国ではなく「出来ない人」が迎え入れられる神の国を語られたのでした。別の言い方をすれば「神さまの愛を実行していると自認する『善人たち』が入る神の国」ではなく、「神さまの愛を実行しきれない『罪人たち』が迎え入れられる神の国」を宣べ伝えられたのです。

ですから、主イエスがこの金持ちの男に「君に欠けている」と気づかせようとしたこと。それは「自分は神さまの愛の戒めを実行することのできない、愛に貧しい者である自覚」だったのではないかと思うのです。特にこの人は「律法の大切な教えはすべて守ってきました」と主イエスの前で胸を張って語った。主イエスは「律法を守っています…と言うなら、本気で神を愛し、本気で隣人を愛してみたらどうだ」と迫った時に、この人は生まれて初めて挫折を味わい、「できない自分」「神さまの愛を実行しえない、貧しい愛の自分」を思い知らされたのです。そのために彼は「自分は神の国にふさわしくない」と考え、「気を落とし、悲しみながら」立ち去ってしまったわけですが、でも彼が「出来ない自分、愛の貧しい自分、ふさわしくない自分を思い知らされたこの時こそ」、立ち去らずに主イエスのもとにとどまり続けるべきだったのです。そうしたならば、主イエスはきっと深い慈しみをもってこう語りかけられたことでしょう。「君が求めている永遠の命があふれる神の国は、『神の愛を実行出来た人が入る場所』ではなく、『神の愛を実行できない自分を知る人が神さまの慈しみによって迎え入れられる場所』なのだよ。君は私の厳しい言葉に『自分はふさわしくない』と思ったのかもしれない。けれども『人にはできないが、神にはできる』。君は自分を救うことはできないけれども、神は君を救ってくださる。神は『ふさわしくない君』を愛してくださっているのだから」と。そして「わたしに従いなさい」と彼を招かれたのではないかと想像するのです。この人の持っている「神の国のイメージの方向転換」を主イエスは促したのでした。

同時に、主イエスはこの男に「祈りの方向転換」の必要性にも気づかせようとしたのではないかとも思います。「君は真剣に永遠の命を祈ってきたのだろうが、それは『自分だけの救い』を祈ってきたのではないか。君は一度でも『みんなの救い』を祈ったことがあるか。社会に貧しい人たちが大勢いる中で、なぜ自分はこんなに富に恵まれているのか、神さまの御心はどこにあるのだろう…と考え祈ったことがあるか。あらためて一緒に生きている人たちみんなに注がれている神さまの愛のまなざしに心と体に向けて、祈り求めるべき『救い』を考えてごらん」と。

主イエスが宣べ伝えられたのは「出来る人」の救いではなく、「罪人」（神さまの御心を生きることができない者）の救いです。そして「罪人」がみんなで神さまの愛を喜び、分かち合い、祈り求めていく「神の国」です。残念ながらこの時、この男は主イエスのもとを立ち去るのですが、慈しみをもってこの人を見つめられた主イエスは彼が改めて主イエスの示された「方向転換」に気づき、再び主イエスのもとに戻ってくることを祈り続けられたに違いないと、わたしは想像するのです。